

○松井孫右衛門

度会郡田丸在、曾禰村里中勘吉と言うの四男で、山田中島町字中野の風呂世古に住した伯父の養子となった。古来宮川の堤は洪水の為に数々破損し、その度に家屋の流失、田畑の荒蕪を来して住民の嘆きであったのを、この孫右衛門は座視するに忍びず、人々が、この上は人柱でも入るので無くば堤防も完全に出来まいと言うを聞き、心ひそかに決する所あり、自ら申出でてその人柱に立つ事となった（これについて、袴に継当てをした人を人柱にすべしと申出して自分の袴に継ぎ当てをしていたということ、その娘がこれを嘆いた事などの話は、恐らく長柄橋の人柱の伝説の改作らしい）。然して人柱に立った模様の伝説には涙ぐましい物語を残している。

さていよいよ孫右衛門人柱となることに定まりしかば、清身淨衣して堤防の破損せざる様に神仏に祈り、仏具を携え皆々に生別して入棺せしかば、血族朋輩等涙ながらに告別せしも、なるべく息の長く保たんことを欲し、棺内より堤上まで竹筒を通し、食物等を入れて埋棺し、代わる代わる通夜せしが、初めの程は竹の筒より鐘の音聞えしも、その音時を経るに隨いて弱くなり。三日目には遂に聞えずなりしかば、最早往生せられたるならんとて、泣く泣くその筒を抜き取りしという。

人々これを憐んでその所に供養の石像を安置したが、年を経て荒廢に歸していたのを、大正四年九月、付近の青年会の人達によって再び修理せられ、その墓石に由来が刻せられた。その文によれば、彼の人柱に立ったのを寛永十年八月二十五日としてあるが、年代月日に関してはなお疑問が挿まれている。

〔神都模範人物集〕

【出典】宇治山田市役所『宇治山田市史』（昭和4／1929年）

下巻 1376～1377頁

※原文を常用漢字、現代仮名遣い等に改めてあります。